

第3分科会「生活科での飼育」

— 1年生が本気でウサギとかかわった実践を通して —

大内美智子* 小野有希子**



きっかけは1年生が入学して間もなく始まる「学校探検」だった。1年生それぞれが、ワクワクドキドキしながら学校のさまざまな場所を探検し、施設や設備に気付いたりいろいろな人に出会ったりして、学校の様子を知り、自分の学校という意識をもち学校生活の基盤づくりをしていく学習となる。子どもたちの何人かは校長室を訪れ、質問や発見、疑問等を伝えに来て「校長先生すごいもの見つけたよ。」等の報告をしてくれる。その中で一人の女の子が「動物のお家に一人だけうさぎさんがいたよ。一人ぼっちでさびしそうだった。」と伝えに来た。本校の飼育舎は校舎裏の崖下にあり、子どもたちにとっては寂しそうと感じる場所であり、そこに一羽ポツンといいるうさぎ



を見てかわいそうだと感じたのだろう。その女の子の発見が他の子にも伝わり、それをきっかけにうさぎを見に行ったり触ってみたいと感じたりするようになつた子どもたちが増えた。そこで、担任はこの一羽だけのうさぎと子どもをかかわらせることで、さまざまな学びの場が出来るだろうと考えて、生活科の単元を構想した。

<単元名> 「ひとりぼっちにしないよ！クッキー ようこそ！レオン」

この学習のねらい

【生活科の内容(7)動植物の飼育 (1)学校と生活】

うさぎを大切に育てたり世話をしたりする活動を通して、変化の様子や生命をもつてることに気づき、飼育委員や友達と協力しながら愛着をもつてかかわり続けることができるようとする。

子どもたちの実態

動物に直接触れることに抵抗を感じる子はいなく、またアレルギーをもつ子もない。しかし小動物を抱いたりたくさん触れ合ったりした経験は少ない。家では小動物を飼っている子はほとんどいないが、虫や金魚を飼っている子はいる。初めてうさぎに直接触ったときには、どのように触れたらしいのかわからず戸惑っている様子が見られたが、触ってみたいという気持ちは感じられた。

学習材「うさぎの飼育」の価値について

1つ目に、学校にいるうさぎは、会いたいときにいつでも会いにいくことができ、継続的にかかわることができるものである。毎日の世話を続けていくことで、うさぎの少しの変化にも気付くようになり、「今日はどうしているかな？」と気になったりしながら学校に来ることで、自分の毎日の生活が変わることが期待できる。また、初めは一方的なかかわり方だったものが、うさぎが安心できる方法を考えて接していくうちに相手の立場に

立ったかかわりができるようになっていく自分自身への気付きも生まれると考える。

2つ目に、自分たちの「こうしたい」という思いの実現のため、学校の中にいる人たちとのかかわりが広がることが期待できる。うさぎのお世話がしたいという思いをもったときには、5、6年生の飼育委員に自分たちでお願いをしに行き、話を真剣に聞いて、「自分たちでやってみよう」という気持ちをもつことができる。また、活動を通して、思いや願いを学校の中にいる人たちに伝え、実現させていくことで達成感を味わうこともできる。このようなことを通して、学校生活を豊かに広げて楽しく生活していくことが期待できる。

うさぎは、直接触れると命のあたたかさを実感することができ、抱くと心臓の音を感じることができる。本で調べたり、誰かから聞いたりして知ること以外にも、直接触れあって思わず出てきた子どもの言葉や思いを大事にし、細かく取り上げながら活動を進めていくことで実感的に気付くことがたくさんあると考えられる。しかし、1度や2度直接触れ合うのでは思いは高まらない。そこで、年間を通して単元構成をし、継続的なかかわりができるようにした。その中で、初めはただ「触りたい」という思いから触れあっていったものが、次第に「うさぎの気持ちを考えて触ろう。ときにはじっと見ていよう。」という相手の立場に立った見方や考え方へ変わっていく姿に着目したい。うさぎのことを大事に考えられた発言を拾い、たくさん褒めて価値づけしていくことで、少しずつ変化していく自分自身の姿に気付くようにしていきたい。

また、飼育活動は毎日の休み時間に行われるため、友達の飼育活動の様子を見て、よいところを見つけることは難しい。そこで、活動の様子をビデオで記録し、話し合いの場で活用したり、自分自身が活動している様子を振り返ったりすることができるようにならたい。

学習のポイント

○うさぎとのかかわりについて

本校で飼育しているうさぎは、1羽だけである。4月の学校たんけんでうさぎを見つけた子どもたちは、その1羽のうさぎを「1人ぼっちでかわいそう」だと思った。1羽だけしかいないうさぎでは、子どもがかかわりを十分にもてないのでないかと考えたが、毎日見に行くほど子どもたちがうさぎに夢中になっていることと、うさぎを1人ぼっちにしないで、楽しませてあげたいという思いをもっていることから、うさぎを増やしていく活動が期待できると考えた。子どもたちがうさぎのことを大事に考えて、うさぎが生きていくために必要なものを準備したり、新しいうさぎに来てもらえるように学校の中にいる人にお願いをしたりする活動が、壁を乗り越えていく経験になると考える。

また、動物は生きているものであるため、自分が思ったようにならないことがある。楽しませたいと思って近づいても、なかなか自分の側に来てくれないこともある。しかし、関わりを続けていき、うさぎの様子を丁寧に観察しながら気持ちを近づけていくことで、動物の立場になって行動できるようになっていく自分自身に気付くことができる。また、友達と一緒に世話をしていくことで、友達のよさにも気付くことができる。

○授業の構想と実際の展開について

小単元(1)では、子どもが「うさぎに会いにいきたい」という思いを生かして、何度も学校のうさぎに会いにいく活動をする。うさぎを見れば、「触りたい」という気持ちが強くなると考えられるため、直接触れるができるように、うさぎをサークルに出して触れ合える場を設定する。また、触ってみるだけではなく、時にはじっと見つめる時間を意図的に設けることで、「うさぎはいつも口がもぐもぐしているね」と行動の愛らしさに気付いたり、「耳が片方たれているね。どうしてかな?」と疑問を見つけたりと、気持ちがぐっと近づいていくようにする。

うさぎに心を寄せて、「やっぱりうさぎの友達を増やしたい」という思いが生まれたら、自分たちでその思いを実現さ

せるために校長先生や飼育委員に相談する。しかし、一度で受け入れてもらわずに、「もっとうさぎのことを知らないといけないよ」という課題を与えてもらうようにする。そこから、うさぎの世話をしてうさぎにもっと近づくという活動につなげていく。うさぎの飼育活動は、小単元(1)から(3)まで継続していくことで、触れ合い方が少しずつ変わっていく自分たちに気付けるようにしたい。うさぎの世話で分かったことをもとに、もう一度新しいうさぎを迎える計画をしっかりと立てた上で、自信をもって新しいうさぎをもらえるように校長先生にお願いする。

いざ新しいうさぎを迎えるとなると、いろいろな問題が生じてくる。小単元(2)では、うさぎを迎える前から、来た後に出てくる様々な問題を解決していく活動をする。世話をして得た知識だけでは分からないことも生まれてくる。身近な人に聞いたり、調べたりすることが必要になってくる。また、子どもたちは「うさぎに友達ができたら、喜ぶはず」と信じているが、情報を集める中で、「うさぎ同士がけんかをするかもしれない」ということにも気付き始めるだろう。自分たちの思いと、うさぎのことを考える気持ちが葛藤する場面も生まれると考えられる。新しいうさぎと、前からいるうさぎの世話の仕方についても話し合わなくてはならない。小単元(2)では、ゆっくり時間をかけて一つ一つの問題と向き合っていくようにしたい。

いよいよ1年生も終わりという頃になると、これからのかかわりをどうしていくかという問題が考えられるため、小単元(3)ではその後の世話についての話し合いに入る。ここでは今までのうさぎとのかかわりをビデオでじっくり振り返ってから、自分たちの気持ちを確かめた上で、これからどうしていくかについて話し合いができるようにしたい。

○学びの接続について…次学年へ、他教科等へ関連

本校では、一年生で命のぬくもりを感じることのできる小動物と触れ合い、生きものへのかかわり方を学んだり、

大切にする心を育てるようしている。二年生になったときは、その経験を生かして虫の飼育活動をし、住みやすい環境を作ったり、愛着をもってじっくり観察したりすることができるようにならう。道徳の時間には、「みんないきているよ」(光村図書)を扱い、自分たちが関わるうさぎへの接し方を振り返って考えるようになる。国語では、「しらせたいな、見せたいな」でうさぎのことを短い言葉や絵で表現したり、「ずっと、ずっと、大きだよ」では、主人公と自分を重ねたりすることで、動物への気持ちを確かめるようにならう。

実際の主な学習の流れ

<表題>小単元(1)うさぎさんとなかよくなりたい！(6時間+常時活動)

○活動・子どもの反応

うさぎを飼育小屋に頻繁に見に行くようになった子どもたちは、直接うさぎと触れ合いたいという願いをもつた。そこで子どもたちがうさぎと触れ合う機会を設け、うさぎの特徴や性質を学ぶ活動を行った。

<クッキーの体は「ふわふわ」「ぽかぽか」なんだね>

○うさぎと直接触れあい、うさぎにしてあげたいことを考える。

- ・前の作戦どおり、グループで中に入ろう。
- ・ぶるぶるふるえていたよ。緊張しているのかな。
- ・やっとさわれた。ふわふわだった。
- ・心臓の音が、ドクドク鳴っていたよ。
- ・ずっとさわっていたらとても温かかった。
- ・お友達がいると、もっと楽しそうだな。



で、うさぎを小屋から出してサークル内で子どもたちと触れ合えるような活動を組んだ。

この後、より一層子どもたちの興味がうさぎに向き、飼育委員に頼んで自分たちも世話を分担してさせてもらうようになった。

＜表題＞小単元(2) あたらしいうさぎさん、たてのしようがっこうへようこそ！（15時間十常時活動）

○活動・子どもの反応

1羽だけでなくうさぎを増やすにはどう

＜新しいうさぎさんに来てもらうようにうさぎのことをもっと知りたいな＞
○今までわかったこと、もっと知りたいことを話し合う。

- ・クッキーは、キャベツの芯が好きなんだよ。水っぽい野菜は、おなかをこわすからあげちゃいけないって飼育委員さんに聞いたよ。
 - ・石拾いをしたよ。クッキーがつまづいてケガをしないためにするんだって。
 - ・食べられるものは、キャベツの他にもあるかな。
 - ・小屋には穴がいっぱいあるけど、他に必要なものはないかな。
- 本や図鑑を使って、うさぎの好きな食べ物や、住みかについて調べる。
- ・キャベツ、にんじん、たんぽぽの葉、ほうれんそう、ブロッコリーとともに食べるんだって。
 - ・チョコとか、ケーキとか甘いものはあげちゃだめなんだね。
 - ・この本には、うさぎがかくれるトンネルみたいなのがあるよ。作ってあげようよ。
 - ・作って置いてもいいかどうか、飼育委員さんに聞こう。

うすればいいのか、話し合った子どもたちはもっとうさぎのことをよく知りたいと思うようになった。

世話の仕方に自信をもってきた子どもたちは、「新しいうさぎさんをもらいたい。」と校長室まで頼みに来た。他の学校から貰い受けたためには、数々の問題があったが、子どもたちの本気はそれを

＜やったー！うさぎさんがきたよ！＞
○あたらしく来たうさぎとじっくり向こう

- ・かわいいね。目は赤いんだね。
- ・すごく元気だね。何才なのかな？
- ・とってもふわふわで、あたたかいね。



- ・名前をきめようよ！
- ・ちょっとだけ、教室にいさせていいかな。

＜新しいうさぎさんと＞

○新しいうさぎと触れ合い、これからどうするかを考える。

- ・すごくおとなしいよ。まだ緊張しているね。
- ・えさは何が好きなのかな？調べたものを持ってきて、あげてみよう。
- ・うんちがクッキーよりも少しやわらかいね。
- ・もう少し慣れるまで、ここにいさせてもいいかな。
- ・クッキーと一緒にしちゃだめだって聞いたよ。
- ・学校のみんなにもお知らせしよう。
- ・レオンのお世話を、自分たちだけでやってみたいな。

乗り越え、新しくうさぎを1羽もらうことが出来た。

しばらくは、教室横の廊下スペースにサークルを設置してレオンを入れ、1年3組がお世話をすることになった。日に日に子どもたちはレオンに心を傾けるようになり、病気になってもレオンに会えないと寂しいから休まないという子まで出てきた。

そんな時、飼育委員の一人が、委員会のイベントのために勝手にレオンを飼育小屋にもっていくという事件が起こつ

た。血相を変えて子どもたち全員が、校長室に飛び込んできた。泣きながら「校長先生、僕たちのレオンを飼育委員のお姉さんがもっていちゃつた。」



「許せない。」「早く取り戻して。」とたいへんな騒ぎになったが、それを契機にレオンをずっと1年3組のものにしてよいのか、クッキーとの関係はどうするのかといったことが問題になり、何度も話し合うようになった。

<これからレオンをどうするか考えよう>

○戻ってきたレオンのお世話をしながら、これからることを考える。

- ・レオンはやっぱり外が好きみたい。楽しそうだね。

○自分たちのお世話の様子を振り返り、がんばりを確認する。

- ・○○さんは、ふんのそうじをいつも自分からやっていて、えらいなと思ったよ。

- ・飼育委員さんがいないときでも、できるようになったね。

- ・前みたいに、穴を壊しちゃったりする人がいなくなったね。

- ・レオンが本当に楽しいためやクッキーのことと考えて一緒にしよう。

- ・飼育委員さんと相談して飼育小屋に連れて行く時を決めよう。

- ・これからも、うさぎさんを大事にしていこう。

- ・だっこが上手になったよね。前みたいに、うさぎが恐がらなくなったよ。

この実践を通して

1年3組の子どもたちが、全員で校長室にやってきて渡した手紙には「どうしてもうさぎを増やしてほしい、そのため何度もみんなで話し合ったよ。」という内容で子どもたちの思いが溢れていた。始めはおそるおそる、そして徐々に上手に抱きかかえられるようになり、糞の始末や掃除もきちんと自分たちで出来るようになった。新しいうさぎを飼育委員が連れて行ったときには、必至な顔で校長室に訴えにきた。「レオンがいないならもう学校に来ない」といった子までいた。この頃にはうさぎの存在が子どもたちの中でとても大きくなっていたことが分かる。この時子どもたちは、新しいうさぎレオンを飼育小屋に戻すことが出来るだろうか、と担任と私は心配した。しかし、うさぎに触れあいながら、本当にレオンやクッキーのためになるのはどんなことだろうと考えを深めていく子どもたちの変化が見られた。動物を飼ったことがない子も多くいたが、粘り強く継続してかかわったことで、子どもたちの中に命の温かさや動物のもつ愛らしさ、特性などが実感としてとらえられていったよう思う。そして、うさぎと触れあったことで相手を大切にすることの意味についても考え、精神的にも成長したことを感じた。実際に触れあって一緒に過ごさなければ感得できることがあることを再認識した。本校では、この実践を生かして、1年生の生活科で小動物を飼うことカリキュラムに位置づけた。

(*横浜市立立野小学校校長

* * 横浜市立立野小学校教諭)